

なみかわそうすけ
濤川惣助の七宝の見どころ

東京藝術大学大学美術館長 黒川廣子

迎賓館赤坂離宮・花鳥の間を彩る 30 枚の七宝額は、明治時代の七宝界の巨匠であるなみかわそうすけの代表作であるのみならず、日本の近代七宝焼の究極の到達点であり、明治 41 年（1908）の制作当時から変わらぬ色彩や輝きを発するモニュメンタルな作品です。四季折々の花鳥図を表す楕円形の七宝の画面（50×38.6 cm）に、帝室技芸員の彫刻家、石川光明が制作した木曾産の茶褐色の木材の壁と色を合わせた唐草模様の木彫の額を添え、花鳥の間の東西と南の壁を飾っています。その作品の魅力は、作者の並々ならぬ苦心の成果である独自の七宝焼の技法と美しい釉薬の発色、及び原画（わたなべせいてい）の再現という複合的な要素から感じられるものであり、巧みな技への注視及び原画との比較でより実感できるため、本稿はこの点に着目して解説を述べますが、まずはなみかわそうすけの略歴と評価を確認しましょう。

なみかわそうすけ
濤川惣助の略歴と評価

弘化 4 年（1847）に下総国鶴巻村（現・千葉県旭市）生まれ。

明治 3 年（1870）日本橋で酒屋を営業。

明治 10 年（1877）第 1 回内国勸業博覧会の観覧を機に陶器業へ転身。愛知、瀬戸で陶磁と七宝を観察。

明治 11 年（1878）日本橋新右衛門町に陶磁器店を開店、アーレンス商会の七宝工場買収。

明治 13 年（1880）わたなべせいていの協力を得て無線七宝を発明、牛込神楽坂上に工場新築。

明治 14 年（1881）第 2 回内国勸業博覧会で名誉金牌（名古屋七宝会社出品）

明治 18 年（1885）ロンドン万博で金牌、ニュールンベルク金工万博で金牌。

明治 20 年（1887）名古屋の大日本七宝製造会社の東京分工場（小石川）も買収。

明治 22 年（1889）パリ万国博覧会名誉大賞。

明治 23 年（1890）第 3 回内国勸業博覧会に《七宝貼込屏風》（七宝画史屏風）で名誉賞金牌。

明治 26 年（1893）シカゴ・コロンプス世界博覧会に《七宝富嶽図》で名誉大賞。

明治 29 年（1896）帝室技芸員に任命。

明治 33 年（1900）パリ万国博覧会大賞。日本銀行のために《昇旭之図》（日の出）制作。

明治 37 年（1904）セントルイス万国博覧会最高賞。

明治 39 年（1906）東宮御所花鳥の間の七宝額絵制作計画開始報道。明治 42 年東宮御所竣工。

明治 43 年（1910）2 月 9 日 肺の病で療養中、平塚の別荘で死去。

同年の日英博覧会（5 月 14 日～10 月 29 日）に《海上図省線七宝扁額》で名誉大賞。

没後すぐに、明治時代の窯業界の功労者であった塩田眞が新聞の追悼文を寄せており、それによれば瀧川は当時の有線七宝に飽き足らず、新機軸を出そうと苦心した結果、無線七宝を作り上げ、釉薬の開発でも失敗と損害を重ねながらもついに大成功をおさめました。とりわけ当時の七宝焼における最も困難な「ぼかし」を完成させ、また「平物」（平な板面に七宝焼を施す作品）を自由に制作したことが特筆すべき功績であったと述べています。

（「故瀧川惣助氏 無線七宝の発明家 塩田眞氏談」『朝日新聞』明治43年（1910）2月12日）

同じ新聞記事に、花鳥の間を含む数々の瀧川の七宝の原画を描き、協力して無線七宝の開発に取り組んだ渡辺省亭も、作品のことだけでなく長年共に歩んだからこそわかる瀧川の人柄について触れています。これによれば、瀧川は極めて穏やかな人でしたが芸術については頑固で見識も深く、殊に意匠については同業者間希に見る天才でした。彼が最も気を遣ったのは光線と色彩で、日本画の特色を西洋画風に発揮することを理想とし、作品の模様はすべて写生に基づく絵画を主としていました。無線七宝の発明については多大の時間と金銭とを費やし随分耐えがたい苦辛も経験しましたが、夫人の米子が男優りの女で苦辛を苦辛ともせず、大に彼を助けました。彼の成功の半分は夫人の内助の功によるもの、と述べています（「故瀧川惣助氏 渡辺省亭画伯談」朝日新聞 明治43年（1910）2月12日）。

これらの追悼文から読み取れる瀧川の七宝焼における功績は、多大な苦勞の末の無線七宝の開発のみならず、釉薬の色彩の発色や「ぼかし」の表現の工夫、そしてそれまで壺や花瓶などの器に施された七宝の釉薬を、大きな平な額面に破綻なく施すことの難しさを克服したことでしょう。また、当時の他の七宝焼のような細かい文様をふんだんに施す作品とは異なり、七宝の釉薬を用いて写生に基づく日本画を西洋画風に表現することは革新的な試みでした。現に瀧川の履歴上の重要な作品である、明治26年（1893）シカゴ・コロンブス世界博覧会出品の《七宝富嶽図》（重要文化財、東京国立博物館）、明治33年（1900）パリ万国博覧会出品の《七宝製墨画月夜深林図額》（三の丸尚蔵館）や同じ頃の《昇旭之図》（日本銀行）等は、大きな平面の絵画の七宝額であり、これらの評価をよく示す作品です。

七宝の技法

七宝の制作では、主には銅板に下絵を描き、リボン状の銀線を下絵の線に合わせながら文様やモチーフの形を作り、
白笈びやくきゆうという紫蘭しらんの根から作った糊を使って銀線を銅板に置いて固定していきます。その銀線を輪郭線として、内側に様々な色のガラスの粉状の釉薬ゆうやくに水や糊を加えて、筆で輪郭線の上に差します。ガラスの粒が溶けるまで焼成して、釉薬ゆうやくの厚みが銀線の高さになるまで施釉と焼成を複数回繰り返します。最後に、釉薬ゆうやくの表面を研磨して仕上げます。

〈七宝焼の工程〉

(工程順：右上から左下)

1. 「生地」銅板に下絵を描いた状態
2. 「鑑焼かんやう」銀線を下絵に合わせて固定し、焼き付けた状態
3. 「一番焼いちばんやう」～「四番焼よっぴんやう」銀線の内側に釉薬ゆうやくを差し、1回～4回焼成した状態
4. 「艶砥一あやど」～「艶砥八あやど」研磨の8段階

この有線七宝の工程に対して、無線七宝は、釉薬ゆうやくの焼成を繰り返す途中の段階で銀線を抜くことにより、輪郭線をなくす技法です。下記の2図は同じ図案を有線七宝（左）と無線七宝（右）で表現した見本ですが、比較した時の輪郭線の有無による印象がずいぶん違います。



有線七宝



無線七宝

右の「無線焼艶」は銀線を途中で抜き、焼成した面のツヤのままの状態



〈七宝焼の工程〉

(東京藝術大学美術学部工芸科蔵)

花鳥の間の七宝額の技法

前述の^{わたなべせいてい}渡辺省亭による新聞の談話において、^{なみかわ}濤川が最も苦心したのが東宮御所の大食堂の花鳥三十種と小食堂の果物と魚類の作品であったと述べています。これらの七宝額を、迎賓館赤坂離宮の昭和の改修時（昭和40年代（1968～1974））に洗浄研磨を担当した田中輝和（1936-2012）は、^{なみかわ}濤川の技法について詳細に観察した知見を基に解説しています（田中輝和「迎賓館の七宝」『国宝 迎賓館赤坂離宮 七宝の美』茜出版、2011）。これによれば、迎賓館の七宝は有線七宝と無線七宝が組み合わせられ、無線七宝には、「忍び針」、「抜き針」という技法が駆使されていると述べています。^{ゆうやく}釉薬の厚さより低い銀線（「忍び針」）を置き、^{ゆうやく}釉薬を施して焼いた後、そこに背の高い銀線を付け、^{ゆうやく}釉薬を施して焼く前にその銀線を抜き取ります（「抜き針」）。この技法により無線でも、異なる色の釉薬の間がぼけずに、くつきりとした表現に出来ます。また、^{なみかわ}濤川の有線七宝に使われた銀線は、単に色分けのために施すのではなく、^{ゆうやく}釉薬の色と同様、絵の表現の一部として用いられた所が各所に見られます。力強く変化のある表現とするために、銀線について、通常より厚く扱いが難しいものや、たたいたりヤスリをかけたりして太さに抑揚をつけたものを用い、均一な線としてではなく、様々な表情を与えているところがみどころです。

具体的な例として、^{つばめ きょうちくとう}《燕に夾竹桃》という作品の部分で見てみましょう。以下の写真にある通り、葉が茎から生えている付け根の部分あたりの輪郭線には、筆で描いたような太い部分と細い部分があります。



《燕に夾竹桃》部分

さらに、七宝の^{ゆうやく}釉薬づくりにも多大な時間と労力をかけています。絵画の絵の具を混ぜるのとは違って、色ごとに^{ゆうやく}釉薬を作りますが、ガラスを粉末にして作りたい色に合わせて

数種類を混合し、剥離剤を敷いた素焼きの陶皿もしくは焙烙（素焼の土器）に混ぜたガラスの粉末を入れ、高温で溶かし合わせ、冷却後に再び粉末にします。ガラスの粉末が十分に混合されるように、この作業を数回繰り返します。七宝額の地の色にぼかしを多用していますが、ぼかしには数十色の釉薬が必要なため、一つの作品に膨大な色数を使っています。釉薬だけでなく、釉薬を施す「胎」（土台となる素地のこと）の加工、下地、銀線付け、施釉、焼成、そして研磨など想像を絶する手間を要し、濤川の下で、献身的に仕事をした七宝作家の働きがあったからこそ実現できた仕事でした。

田中輝和が迎賓館の七宝額を修理した時の背面の写真（昭和48年（1973）東京藝術大学美術学部工芸科彫金研究室撮影・内閣府迎賓館提供）には、濤川が作品に施した銘が確認できます。中央に梅の花の輪郭の中に「魁」の文字を入れた濤川の号の「魁香」を示すもので、新年の寒い時期に他の花よりも先に咲き香る梅のように、自分は七宝のパイオニアであるという自負を表現するものです。田中輝和は、東京藝術大学の七宝研究室を立ち上げ、日本七宝作家協会の名誉会長となった当時の七宝界のリーダー的存在でしたが、彼によれば、花鳥の間の七宝額は七宝の歴史における最高傑作であると述べています。（小玉正任『国宝迎賓館赤坂離宮 沿革と解説』茜出版、2012）。自他ともに、認められた傑作の証です。



背面の写真（1973年東京藝術大学美術学部工芸科彫金研究室撮影・内閣府迎賓館提供）



参考図 濤川惣助《月に秋草図団扇形七宝皿》（東京藝術大学蔵）の銘「魁」

〈参考文献〉

- ・濤川惣助の作品英文解説書 東京国立博物館所蔵（洋書150-524）書誌情報不明
- ・武藤夕佳理「七宝—旧東宮御所の《七宝額絵》をめぐる二人の七宝家と二人の画家」『家具道具室内史』7号2015.6
- ・武藤夕佳理『並河靖之と明治の七宝業』思文閣出版、2021